



RENPOUDO'S LATE SUMMER COLLECTION.

奥田連峯堂コレクション

彩り
Late Summer

奥田連峯堂

営業時間：11時 ～ 18時

定休日：毎週水曜

〒605-0073 京都市東山区祇園町北側244

TEL:075-561-3655 FAX:075-525-1148

<https://www.renpoudo.com>

✉renpoudo@mth.biglobe.ne.jp

HPIはこちら



1.

古清水 葵文水注

江戸時代

径22cm 高さ19.5cm

全体に貫入が入り、緑釉、青色の釉薬と金彩を用いて葵文様と唐草文様が描かれています。蓋の合口にソゲ有ります。葵文様の部分などの金彩が取れている部分があります。蓋の表に釉薬のはがれている箇所があります。

幕末に磁器焼成が本格的に始まり、これが「清水焼」と呼称されるようになると、江戸時代中期以前に京で焼かれた陶器を「古清水」と呼ぶようになったと言われます。また、江戸時代後期にあっても磁器とは異なる京焼色絵陶器の総称としても用いられています。



2.

古清水 牡丹文手焙

帶山

江戸時代 - 明治時代

径16cm 高さ15cm

牡丹の文様と菱文様が描かれ、丸形の透かしも入っています。高台内に「帶山」の印と「古清水牡丹文手焙 帶山造」の箱書きがあります。帶山与兵衛のことだと思いますが、何代かは不明です。

帶山与兵衛は、延宝年間（1673-81）に初代高橋藤九郎（近江生）が京都栗田東町（東山区）に住み、帶山を称したことに始まるとされています。明治時代に入り、帶山家は錦光山家、安田家と共に栗田口焼を代表する窯元になりました。白釉の陶胎をベースに、色絵や金泥を使い、京薩摩と呼ばれる装飾性豊かな器を造り、陶器の海外輸出をはかり、各国の万国博覧会で銀牌を受賞しました。



3.

源内焼 水滴

19世紀

径7.5cm 高さ4cm

黄色や緑色などで鮮やかな色彩で色付けされています。

布袋、または、金太郎をかたどったものだと思います。底の端の釉薬が一部はがれています。



4.

鍋島 青磁香炉

幕末明治

径7.4cm 高さ8.5cm

口縁から足にかけて少しグラデーションになった青磁がとても綺麗な香炉です。

高台内側の釉薬が一部はがれています。

火屋は使用されていたため、裏側が焼けています。

鍋島焼とは、江戸時代に肥前国佐賀地方を治めた佐賀鍋島藩が徳川将軍家に献上することを目的に創出した特別な磁器です。



5.

古染付 山水文鉢

中国 明時代 万暦年間（17世紀）

径21.8cm×20.8cm 高さ10.5cm

約400年前の明朝万暦年間に中国で作られたお皿です。

見込みには、山水図が描かれています。スレがあります。内側の側面は、チャクラをモチーフにした文様がぐるりと一周描かれています。口縁外側には馬が描かれています。

高台の内側に線状の窯キズが、高台にも窯キズが見られます。

書籍「Kraak Porcelain: A Moment in the History of Trade Maura Rinaldi」に類似品が掲載されています。



6.

辰砂食籠

河井 寛次郎

共箱

昭和

径20cm 高さ19.8cm

「生誕120年 河井寛次郎展 生命の歓喜」図録に同形の作品が掲載されています。
その図録によると、河井家では来客時にふるまう料理に茶碗蒸しがあり、大きな食籠で茶碗蒸しを作り、それを小鉢に取り分けていたそうです。

本作品の蓋表には辰砂釉や鉄釉を用いて花文様が描かれています。
側面は、瓜のようにデコボコしており、ボタンのような凹凸も装飾されています。





7.

花扁壺

河井 寛次郎

共箱

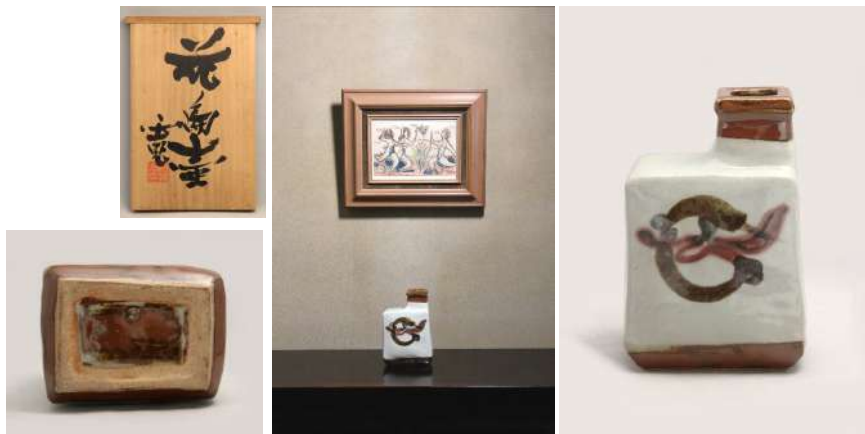
昭和

口径5.8cm×5.2cm 胴径12.5cm×9.5cm 高さ20cm

大正から昭和の時代、民藝運動の中心的役割を担った陶工 河井寛次郎の作品です。

胴の両面に辰砂、呉須、鉄釉を用いて花文様が描かれています。

口が片方に寄っているところが特徴的です。



8.

草花盒子

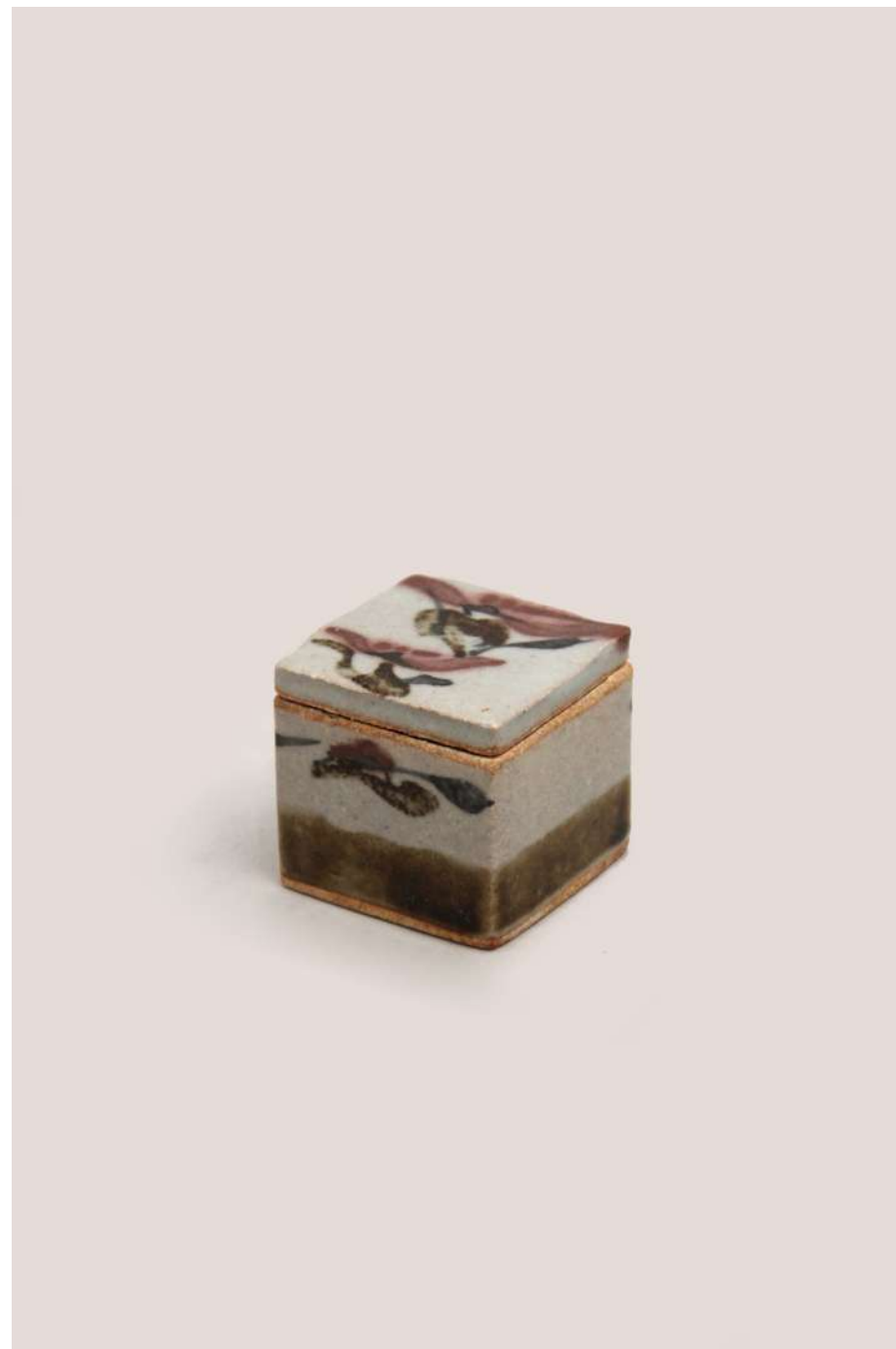
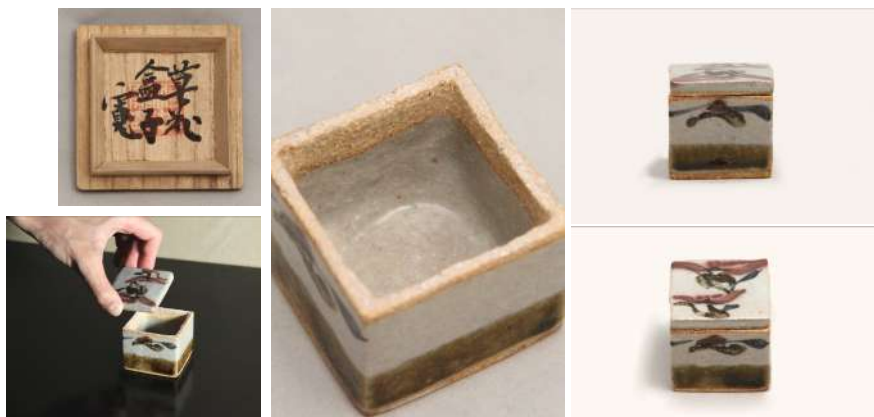
河井 寛次郎

共箱

昭和

径5.5cm×5.5cm 高さ5cm

辰砂釉の赤色が鮮やかな合子です。盒子（合子）は、
ふた付きの小さい容器のことです



9.

青瓷向獅子香炉

2代 真清水 蔵六

共箱

明治 - 昭和

径12.5cm×13.5cm 高さ13cm

足を踏ん張った正面を向く、向獅子と呼ばれる形です。

真清水蔵六は京都の陶工で、2代は国内はもとより中国や朝鮮にも渡って調査し、研究熱心でした。



10.

養老能芝 花入

初代 諏訪 蘇山

共箱

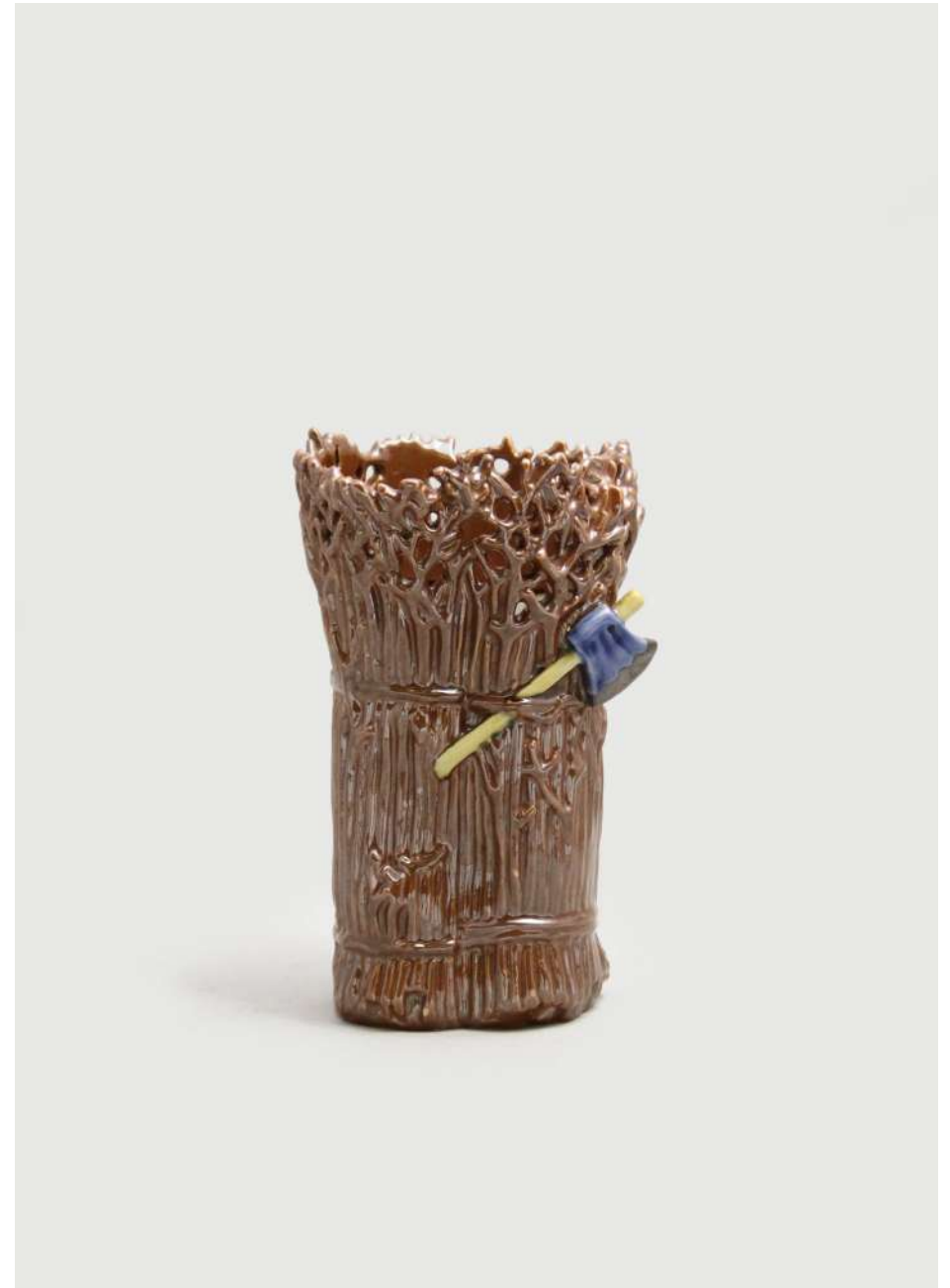
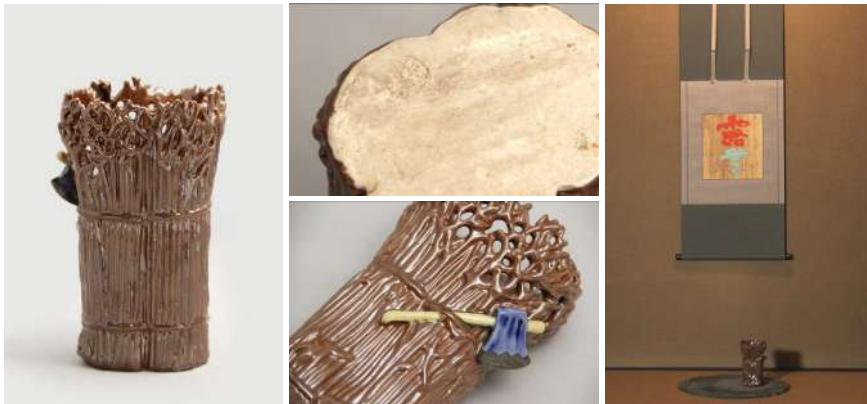
明治 - 大正

径10cm×8.5cm 高さ17cm

帝室技芸員

帝室技芸員は1890年から1944年の55年間のみ存在した皇室による美術作家の保護と制作の奨励制度でした。陶芸界では5人しかいない帝室技芸員のひとりです。初代諏訪蘇山、3代清風与平、初代宮川香山、初代伊東陶山、板谷波山です。

本作は、能の演目である養老を表現していると思われます。薪と鎌で霊水をみつけた樵の老人と息子を表しています。



11.

獅子香炉

5代 清水 六兵衛

共箱

昭和

径14cm×9.5cm 高さ13.5cm

貫入の入った緑釉の上から、意図的に不均一に金彩が施されています。

底に「清」印が有ります。



1 2.

碧玉釉堆泥花瓶

楠部 弥弍

共箱

昭和

口径12.5cm 高さ24cm

表面は細かな貫入が入り、碧玉釉と名付けられた青系の綺麗な花瓶です。

楠部彌弍は、京都市生まれの陶芸家で大正から昭和にかけて活躍しました。作風は多技多彩で知られます。技法は違っても作品の出来にばらつきがなく、どれも優れた完成度の高い作品です。また、後進の指導にも尽力し、多くの弟子を育てました。



13.

色絵南蛮人香炉

5代 三浦 竹泉

共箱

昭和 - 平成

径10.6cm 高さ12.5cm

色絵で南蛮人が絵付けされた香炉です。
縁や胴が輪花状になっており、火屋は葉の形を模しています。
使用されていたためか、火屋の裏側は少し焦げた跡があります。



14.

銹洟幽香花瓶

6代 清水 六兵衛

共箱

昭和

口径24cm 高さ32.5cm

清水六兵衛は、江戸時代中期以降続く清水焼陶工の名前です。

銹洟（しゅうよう）は、玄窯、三彩、古稀彩と並び、6代六兵衛を代表する装飾技法です。



15.

青白磁飾香炉 天空

深見 陶冶

共箱
昭和 -
径15cm×12cm 高さ13.2cm

澄みわたるような光沢を放つ青白磁の香炉です。

「天空」という題がついています。

深見陶冶は、国内の東京国立近代美術館などはもとよりアメリカのメトロポリタン美術館をはじめ、作品が所蔵されており、国際的にも高い評価を受ける陶芸家のひとりです。



16.

練上嘯裂茶碗

松井 康成

共箱

昭和 - 平成

径12.8cm 高さ7.5cm

人間国宝

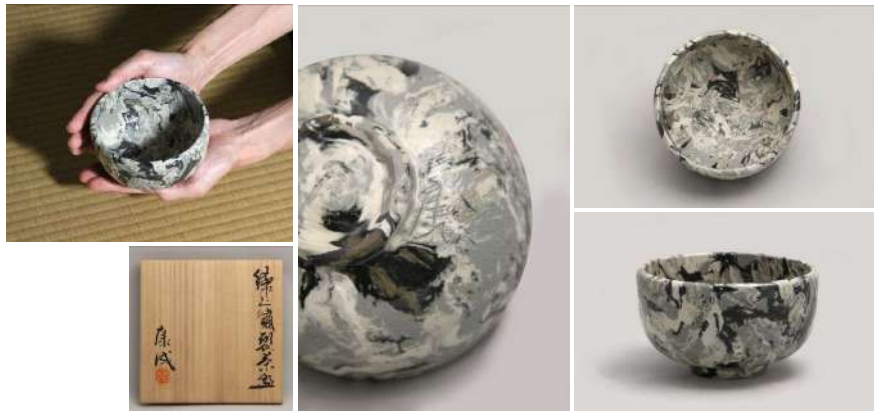
黒やグレーの色味ですが、見込みには1点だけピンク色の部分が有りアクセントになっています。

高台脇に康の描銘があります。

口縁に爪楊枝で刺したような小さな穴があります。

これは、釉薬中の成分が焼成中にガス化し、これが出た跡だと考えられます。

松井康成は、茨城県笠間市の陶芸家で、昭和から平成に活躍した作家で、練上の分野で人間国宝に認定されました。練上の分野で様々な独自の技法を生み出しました。



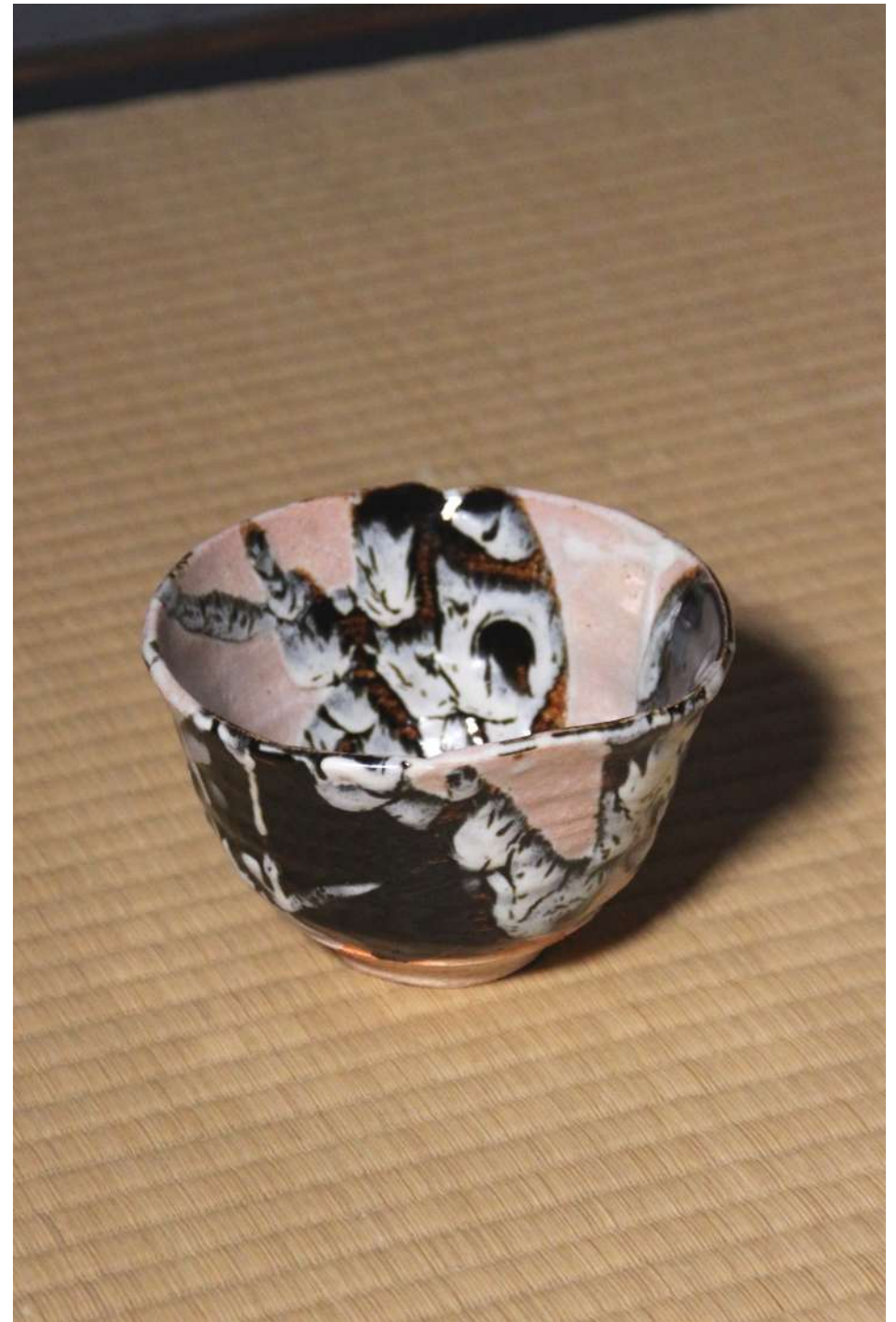
17.

釉象茶碗

6代 清水 六兵衛

共箱
昭和
径14cm 高さ9cm

清水六兵衛は、江戸時代中期以降続く清水焼陶工の名前です。
黒と白の釉薬が混じり合い、独特の雰囲気を出しています。
作陶時に手で押したわずかなへこみを作り、アクセントとしています。



18.

御本写花向鶴茶碗

2代 清水 六兵衛

共箱

坐忘斎家元書付箱

江戸時代

径12.5cm 高さ7.5cm

胴の外側には鶴の文様がある御本茶碗を写したお茶碗です。

内側や外側には、御本茶碗の特徴である赤い斑点状が良い景色となっています。

見込みの茶だまりに小さな窯キズが有ります。

高台脇に、二重枠の六角に清の字の印が有ります。

江戸時代以来の京都 清水焼陶工の名前です。2代清水六兵衛は、幼い頃、父を亡くしたため、休業していましたが、1811年に家業を再興し、六兵衛の名を継ぎました。



19.

乾山意老松画茶碗

2代 宮川 香山

共箱

大正 - 昭和

径12cm 高さ7cm

口縁は少し端反りになり、胴には太い幹の老松が描かれています。高台脇に乾山を意識した「香山」の描銘、高台内に「真葛」印が有ります。

2代 宮川香山は、帝室技芸員の初代香山を助け、優れた作品を残しました。板谷波山と並んで関東の美術界に君臨しました。



20.

葦田鶴蒔絵平棗

淡々斎書付

昭和

径8.5cm 高さ6cm

「葦田鶴（あしたづ）」は、葦の生える水辺にいるところから鶴の別名です。

蓋に鶴が蒔絵され、蓋の内側には淡々斎（1893-1964、茶道裏千家十四世家元）の花押が朱で書かれています。

内側は銀溜で豪華な仕上がりとなっております。



21.

染付捻盛付皿 10客組

5代 清水 六兵衛

共箱

昭和

径19.5cm 高さ4cm

白地に鮮やかな青色が目を引く捻文様のお皿です。
内側だけでなく、裏側にも捻文様が描かれています。



22.

春秋角皿赤絵風幅

芹澤 銑介

絹本肉筆

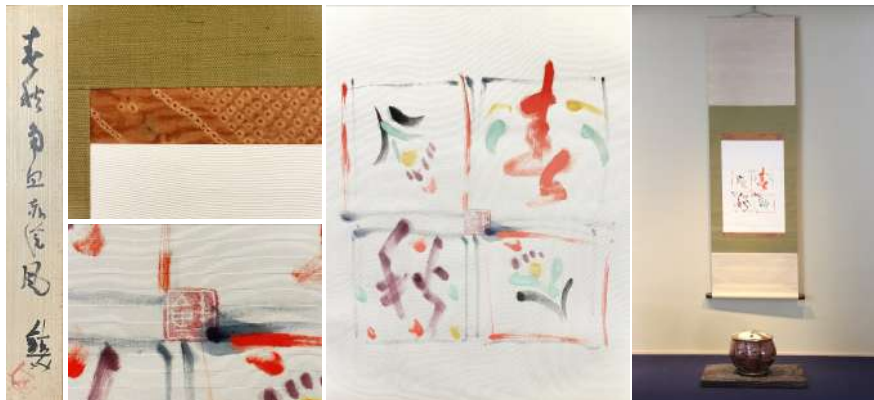
共箱

昭和

幅44.5cm 長さ145cm

人間国宝

芹澤は、沖縄に滞在した際に紅型の調査と技術の習得という本来の目的の仕事のほか、柳宗悦のすすめもあり、濱田庄司とともに壺屋で赤絵を試みています。その後も沖縄から生地を調達して絵付けを行うなど、赤絵に対して終生、情景にも似た想いを抱き続けていたといいます。浮かんだ赤絵の図案について「赤絵もどき」などにまとめています。



23.

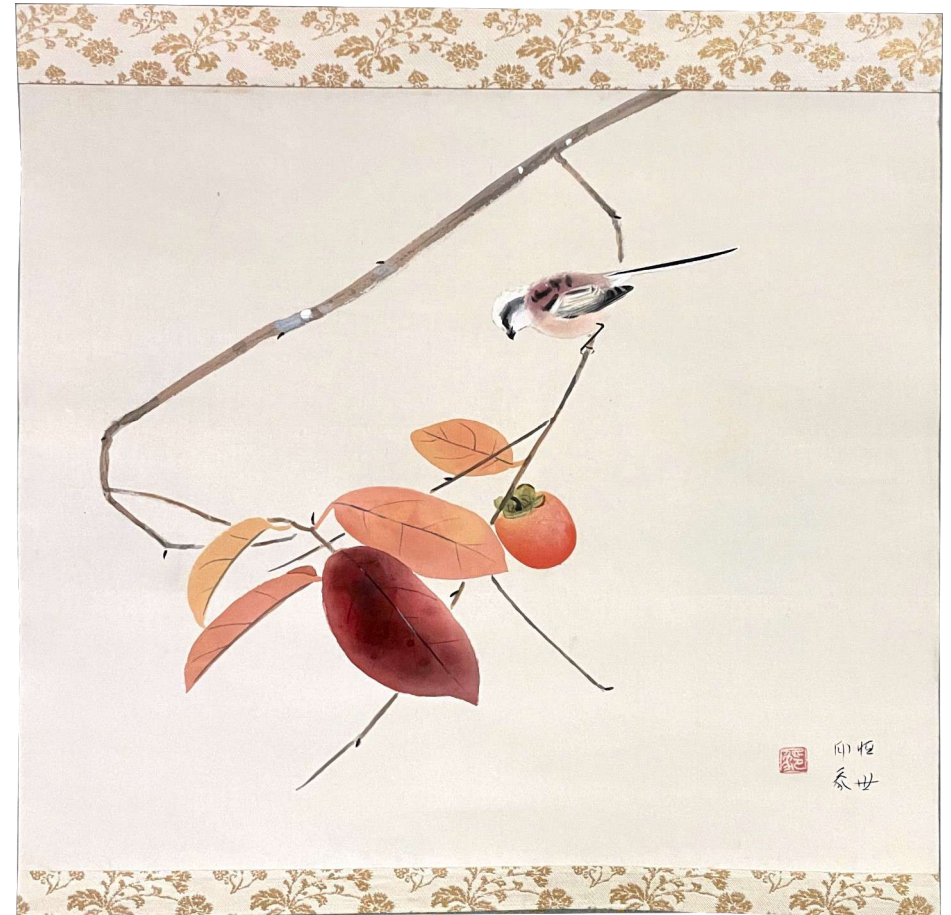
清秋幅

堂本 印象

絹本
共箱
大正 - 昭和
幅56cm 長さ136cm

柿とツグミのような鳥が描かれています。

日本の伝統的な風習で、木守りの柿というものがあります。柿を収穫する時にすべてをとらないで木に実を残しておきます。
食べ物の少なくなる冬に、きっと苦労するに違いない野山の鳥たちや、豊作の願い、そして、木に対する感謝も含まれるようです。



24.

露堂々字幅

芹澤 銑介

紙本肉筆

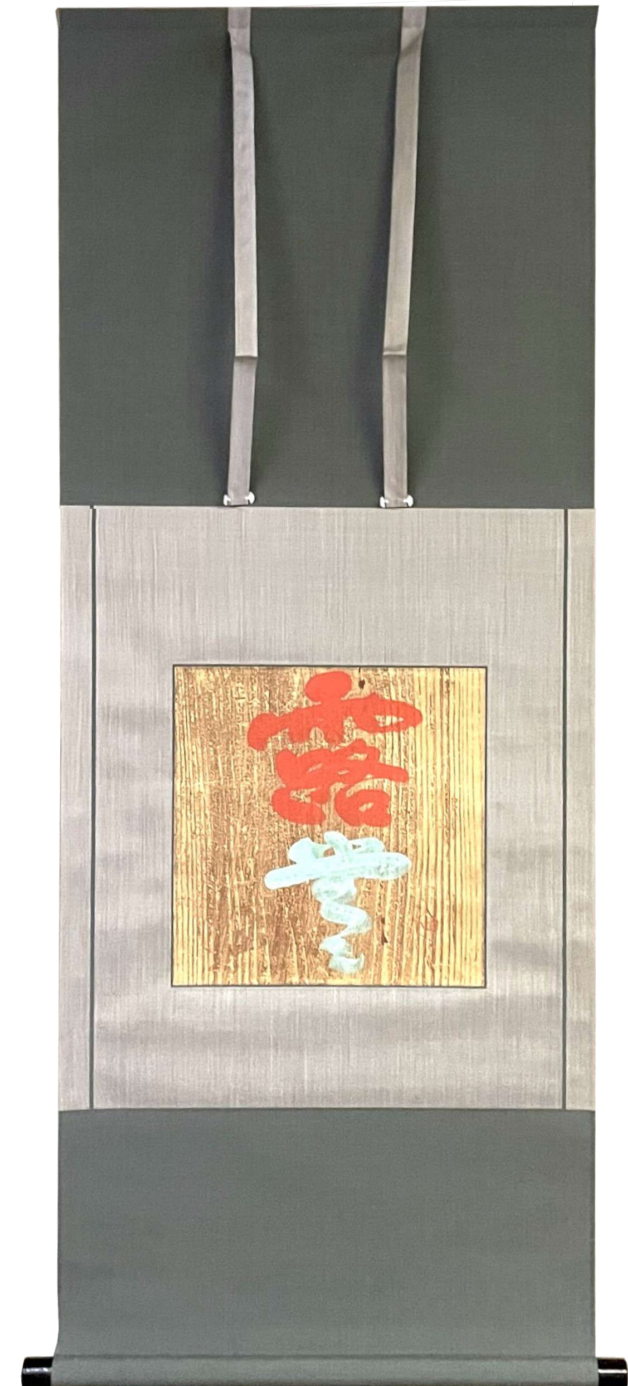
共箱

昭和

幅44cm 長さ120cm

人間国宝

紙に肉筆で「露堂々」書かれています。
露堂々とは、明歴々露堂々（めいれきれきろどうどう）のことで、
その意味は、すべての存在が明らかに、すべての物事がはっきり現われ出ているさまです。



25.

額「文楽おそめ」

須田 剋太

油彩

須田剋太鑑定委員会 鑑定書有

1985年

額のサイズ：縦54.5cm 横45.5cm

司馬遼太郎「街道をゆく」シリーズの挿絵で知られる
須田剋太による油彩の作品です。
本作は人形浄瑠璃 文楽のお染を描いた作品です。
力強くダイナミックな筆致で描かれています。



作家略歴（五十音順）

河井 寛次郎

1890（明治23）年 - 1966（昭和41）年
島根県生まれ。東京高等工業学校窯業科卒後、京都市陶磁器試験場に入所。京都市五条坂に窯を築き作陶を行う。東洋古陶磁の技法による作品を制作していたが、民藝運動に関わり、実用を意識した作品に取り組むようになる。文化勲章、人間国宝、芸術院会員への推薦を辞退。

2代 清水 六兵衛

1790（寛政2）年 - 1860（万延元）年
初代清水六兵衛の子。10歳で父をなくし休業していたが、文化8年22歳で再開して六兵衛の名を継ぐ。土焼きの茶器に加え、白磁や染め付けの作品もある。号は静斎。

5代 清水 六兵衛

1875（明治8）年 - 1959（昭和34）年
京都生まれ。4代六兵衛の次男。名六兵衛のち六和。父の縁で幸野煤嶺に師事。京都府画学校で学んだ後、父より作陶を学ぶ。新進陶芸家のために五条会を組織し、後進の育成にも尽力。

6代 清水 六兵衛

1901（明治34）年 - 1980（昭和55）年
5代六兵衛の長男。昭和20年家業の京都清水焼を継ぐ。号は禄晴。伝統的な京焼の技法に釉薬や焼成の新技法を加える。31年「玄窯叢花瓶」で芸術院賞。51年文化功労者。芸術院会員。

楠部 彌弍

1897（明治30）年 - 1984（昭和59）年
染付、青磁、鈎窯、仁清風など、作風は多技多彩。彩甎と名付けた釉下彩磁は独自のものである。また京焼の伝統を踏まえた色絵は優美と言われる。帝展や日展などで活躍。昭和53年、文化勲章受章。

須田 剋太

1906（明治39）年 - 1990（平成2）年
日本の洋画家。埼玉県生。浦和画家。当初具象画の世界で官展の特選を重ねたが、1949年以降抽象画へと進む。力強い奔放なタッチが特徴と評される。司馬遼太郎の紀行文集『街道をゆく』の挿絵を担当し、また取材旅行にも同行した。

初代 諏訪蘇山

1852（嘉永5）年 - 1922（大正11）年
明治・大正期を代表する京都の陶工。金沢生まれ。東京に出て、彩雲楼旭山に陶画を学んだが、間もなく帰京して九谷陶器会社に勤めた。のち石川県立工業学校彫刻科の助教諭となり、九谷焼の彫像を手がけた。明治33年、京都の錦光山製陶所に招かれ、40年、独立して五条坂に窯を開き、青磁を完成。蘇山青磁と賞された。大正6年帝室技芸員。

芹澤 銑介

1895（明治28）年 - 1984（昭和59）年
静岡市生まれ。東京高等学校図案科卒業後、生涯の師である柳宗悦と沖縄の染物紅型に出会ったことにより型染めを中心とした道に進む。1956年、人間国宝に認定。

堂本 印象

1891（明治24）年 - 1975（昭和50）年
京都生まれ。京都市立美術工芸学校と京都市立絵画専門学校を卒業後、西山翠嶂に師事。帝展に出品を続け、第1回展に「深草」（1919、堂本美術館）が入選、それ以降も受賞を続け、画壇に地位を築く。画塾 東丘社を主宰。24年以來帝展審査員、京都市立絵画専門学校教授、帝室技芸員をつとめ、50年、日本芸術院会員、61、年文化勲章を受章。京都に堂本美術館がある。

深見 陶治

1947(昭和22)年 -
京都生まれ。鋳込み技法による青白磁、立体作品で知られ、海外でも高く評価されている。昭和60年、「イタリア・ファエンツァ国際陶芸展」グランプリを受賞。東京国立近代美術館、大英博物館、メトロポリタン術館などにコレクションがある。

2代 真清水 蔵六

1861（文久元）年 - 1936（昭和11）年
初代蔵六の長男。京都生まれ。明治15年、2代蔵六を襲名。国内はもとより中国や朝鮮にも渡って調査研究を重ねました。

松井 康成

1927（昭和2）年 - 2003（平成15）年
長野県生まれ。明治大学を卒業し、茨城県笠間市にある浄土宗月崇寺の住職の跡を継ぐ。その後、廃窯となっていた、山門下の窯を再興し、東洋陶磁の研究を行う。栃木県の田村耕一に師事。練上手の技法を研究し、完成させ、昭和44年には、第9回伝統工芸総裁賞や日本陶磁協会賞などの数々の賞を受賞。平成5年、人間国宝に認定。

5代 三浦 竹泉

1934（昭和9）年 -
4代竹泉の長男として京都に生まれる。父 四代竹泉に師事。その間、茶道・煎茶道・華道・香道を修業。昭和47年、五代竹泉を継承し現在に至る。竹泉窯の伝統的作風を生かすことに努力し、祥瑞・染付・赤絵・色絵・金欄手・交趾・三嶋・志野・火襷などを研修会得する。また、大気汚染防止法令により使用が禁止された従来の登窯焼成に代るものとして、ガス・電気によるより効果的な焼成法を開発し、成功。

2代 宮川 香山

1859（安政6）年 - 1940（昭和15）年
横浜の陶芸家。本名半之助。帝室技芸員の初代香山を助け優れた作品を残す。大正5年、初代香山逝去後、正式に2代香山を襲名する。帝展・各美術展に出品した。板谷波山と並んで関東の美術界に君臨した。